



『歴史哲学講義』

ヘーゲル／長谷川宏訳 岩波書店／岩波文庫(青)

本 館	請求記号：X/080/I95B/Heg	資料ID：上：700667363 下：700667371
神田分館	請求記号：X/080/I95B/Heg	資料ID：上：700235682 下：700236540

経済学部教授 新田 滋

どういうわけかヘーゲルは19世紀初頭当時のプロイセンの国家体制をもって歴史は完成したと考えていたかのように誤解されてきた。また、ソ連・東欧の崩壊によって欧米型の自由民主主義が勝利し、ようやくヘーゲルのいう「歴史の終焉」が実現したと考えた論者もいた。しかし、ヘーゲル自身は当時のヨーロッパにおける自由、民主主義をめぐる政治的混迷に対して、「未来の歴史が解決しなければならない問題」（下、367頁）であると明言しており、歴史が完成するなどと考えていた節はない。

おそらく哲学の人はヘーゲル哲学の入門編とも位置づけられる緒論の部分ぐらいしか読まず、歴史学や社会科学の人はどうせ実証的に取るに足らないものだろうと高を括って本篇を読みもしなかったのであろう。

東洋世界では皇帝のみが、ギリシア世界とローマ世界では自由民のみが、そしてゲルマン世界では万民が自由であることを認識するというのが、有名なヘーゲル歴史哲学の大筋である。確かにこれだけ聞けば、いかにも哲学的な図式主義に感じられる。しかし、本篇の叙述はじつに具体性に富んだものであり、歴史の読み物としても大変面白い。えに、その洞察力の射程距離の長さに驚嘆するほかはない。さしあたり中国の「東洋的専制」に関する叙述を例にあげれば、西洋人のステレオタイプなオリエンタリズム的偏見と切り捨てられた後に、もう一度拾い直して熟読玩味されて然るべきものであろう。